

ドイツの切手に現れた科学者、技術者達 (16) レオポルド・グメリン

Scientists and Engineers in German Stamps (16). Leopold Gmelin

筑波大学名誉教授 原田 馨
KAORU HARADA

Professor Emeritus, University of Tsukuba.



L. グメリン(ハイデルベルク大学化学教授)誕生200年記念切手。1988年、ドイツ連邦共和国発行。

レオポルド・グメリン

レオポルド・グメリン (Leopold Gmelin, 1788-1853)、ドイツの化学者。

L. グメリンはバーデン・ヴュルテンベルグ州テュービンゲンから輩出された有名な科学者の家系の一人である。父はゲッチンゲン大学の医学、化学教授のヨハン・F. グメリン (J. F. Gmelin, 1748-1804) で、彼の二番目の息子として、ゲッチンゲン (Göttingen) のホスピタル通りにあるヨハンの住居と研究室を兼ねたゲッチンゲン大学の官舎で生まれた。後年この建物は化学教育が盛んになると共に次々と増築が繰り返され、やがてヴェーラーハウスと呼ばれるようになったが、その理由は後述によるものである。

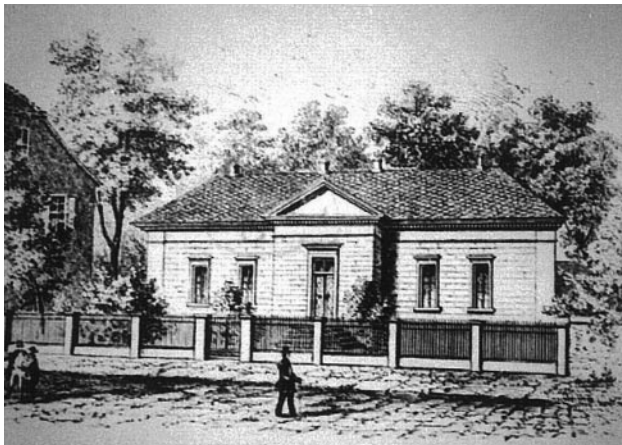
L. グメリンはテュービンゲン、ゲッチンゲン、ミュンヘン大学で化学、医学、数学を学びハイデルベルク大学に落ち着いたが、この間の一年間を、クロム元素の発見者であるパリのヴォークラン (L. N. Vauquelin, 1763-1829) のもとで過ごし、1817年ハイデルベルク大学の最初の化学の正教授 (Full Professor) となった。彼は1851年に引退するまでの34年間この地位にあった。

L. グメリンは教育においても、研究においても一流であったが、多くの化学者に強い印象を与えたのは、1817年に出版された化学事典 (Handbuch der anorganischen Chemie) であり、この書物の初版は3巻よりなる。このようなハンドブックを作ろうとする流れはその後もドイツの学界に続いている。L. グメリンはラボアジエの化学革命の後、未だ整理されていない種々の化学知識から確実な知識を選び、化学を体系づけた功績は大であった。このハンドブックは版を重ねるごとに改訂された。グメリンはこの書物を完全なものにするために大きな努力を払った。1843年に出版された第4版は9巻よりなり、多くの情報が加えられていた。このような化学文献の検索には、有機化合物におけるバイルシュタイン (Beilstein) のハンド

ブックと同じく、次第に歴史的使命を終えつつあるように思われる。世の中はコンピューターの時代となり、ブック型の辞書、事典の時代は終り、書齋での脇役となりつつある。間もなくこれらの書籍をはじめ、情報(インフォメーション)に関するものは殆どすべてコンピューターが関連することになるだろう。

ゲッチンゲン大学の化学教授で、尿素の無生物的生成に成功し、またアルミニウム元素の発見者でもあるF. ヴェーラー(Friedrich Wohler, 1800-1882)は、L. グメリンの学生でもあったが、後に父ヨハン・F. グメリンの後任教授となり、このゲッチンゲン大学の官舎に46年間住み、そしてまたテルペン化学の創始者O. ヴァルラハ等も住み、研究を行っていた。やがてこの建物はF. ヴェーラーの高名さから、その名を冠して人々からヴェーラーハウスと呼ばれるようになった。

L. グメリンの名と一緒に住んだ父の名や、他の研究者の名と共に記念板に掲げられている。



初期のヴェーラー研究所。左端の建物がヴェーラーハウス。

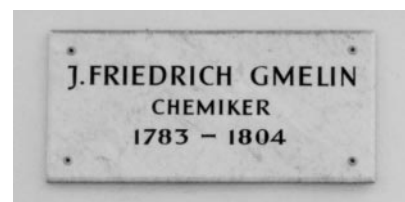


現存するヴェーラーハウス。現在は化学ではなく別の研究所になっている。ここに、L.グメリン、F.ヴェーラー、O.ヴァルラハ等かつての著名入居者の記念版が掲げられている。

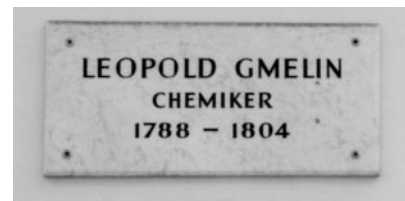
グメリンは食物の消化について研究し、またフェロシアン化カリウム(赤血塩)、タウリンを発見し胆汁色素に対するグメリン試験法を見出した。彼は化学物質の命名法にも貢献したが、ケトン、エステルと云う一般名称はグメリンの命名によるものである。

L. グメリンの墓はハイデルベルクの山墓地にあり、淡色の砂岩の墓石で大分風化を受けているが山墓地の中でも最も古い墓石の一つに属するだろう。

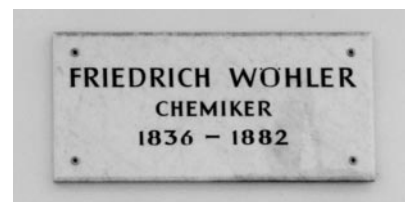
※本稿に掲載の写真は、全て著者の撮影によるものである。



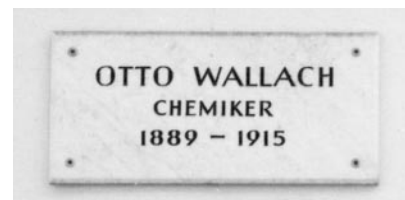
L. グメリンの父、ヨハン・F. グメリンはゲッチンゲン大学で医学と化学を教えた。古い時代には化学は医学に属するものと考えられた。



L. グメリンはゲッチンゲンの父の化学研究室兼官舎(ヴェーラーハウス)で生まれ、比較的早く化学、医学、数学学習の旅を終え、29才(1817年)にはハイデルベルク大学の正教授となった。



F. ヴェーラーの時代に化学教室兼官舎(ヴェーラーハウス)は新しくなり、以後化学教育が盛んになると共に増築が繰り返された。



1889年にはテルペン化学を創始したO. ヴァルラハがヴェーラーハウスに入居した。ヴァルラハ入居以後化学のみならず他の学科の者もヴェーラーハウスに入居した。

ゲッチンゲン大学化学教授の官舎(ヴェーラーハウス)の記念板。記念板に表示されている年号が、それぞれの入居期間。

ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(16) レオポルド・グメリン



若き日のL. グメリン。



ハイデルベルク市のL. グメリンの住居あとの記念板。



加齢したL. グメリン。



ハイデルベルクの山墓地にあるL. グメリンの墓。

表紙写真

キバナヤマオダマキ(黄花山苧環) キンポウゲ科

山で良く見かけるヤマオダマキは普通がく片が青紫色ですが、がく片も花弁と同じ淡黄色のものをキバナヤマオダマキと呼んで区別しています。撮影場所はハケ岳、赤岳鉱泉を目指して北沢を登り、大同心が良く見える岩の位置にひとかたまりとなっていて咲いていました。上高地あたりでは、青紫色よりこの黄色のオダマキの方が多いと言われていました。

(写真・文 北原)

編集後記

新年あけましておめでとうございます。弊誌ケミカルタイムズにご寄稿いただきました著者の皆様、そして読者の皆様には、さぞかし良いお正月をお過ごしになられたことと存じます。輝かしい新年を皆様とご一緒に迎えることができましたことに心より感謝申し上げます。

ケミカルタイムズは、季刊誌として年に4回、毎回約1万部を皆様にお届けしておりますが、快くご執筆をお引き受け頂きました著者の皆様や、

読者の皆様からの多数の暖かいお言葉にも励まされ、今年も無事に新年を迎えることができました。編集委員一同、皆様のご愛読にお応えできるよう、猛進を讃える亥年の良き例えの如く、編集活動に勤しむ覚悟でございます。ご愛読のお申し込み、ご意見、ご希望など皆様からのお声を心よりお待ち申し上げます。

本年もご愛顧のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。
古藤 薫 記



関東化学株式会社

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3丁目2番8号
電話 (03) 3279-1751 FAX (03) 3279-5560
インターネットホームページ <http://www.kanto.co.jp>
編集責任者 古藤 薫 平成19年1月1日 発行